

笑門福来



さぬき
だより

'21

新年号



新年あけましておめでとうございます。

さて、いよいよ4月に「新番丁スクエア加藤さん家」がオープンいたします。これまでの老人介護支援センターに、新たにグループホームと放課後児童クラブが加わり、3つの複合施設となります。

地域の高齢者や子供たち、そして住民の方々にお役に立てる施設を目指してまいります。

皆さまどうかよろしく願いいたします。



特集

特大レポート

「今年のおせちも
大姉評！」



下宿のおばさんから 人生を学んだ(その一)



社会福祉法人さぬき
園長 冨田 繁

謹んで新春のお慶びを申し上げます。
旧年中はひとかたならぬご厚情を賜り、誠にありがとうございます。

さて、私は、昭和四九年から四年間、東京で学生生活を過ごしました。下宿の

おばさんは徳島県の出身で、香川県から来たことをとても喜んでくれました。しかし、厳しい人でした。下宿代は、三畳の部屋と朝夕の食事が付いて月一万四千元。

自宅でないので誰も起こしてくれません。朝食時間に遅れないように毎日起きるのに必死でした。

朝食には、必ずみそ汁と納豆が出ます。「東京は、みそ汁のことを「おみおつけ」っていうのよ。」「熱い方が美味しいわよ。」と、ぐらつと沸かしてから出してくれました。

納豆は嫌いでしたが、おばさんが横で見ているので残すことはできません。目をつぶって飲み込むように食べていました。

おばさん、「四国では馴染みがないだろうけど、東京の人は、だいたい朝食に納豆を食べているのよ。ね、美味しいですよ。」「お、美味しいです。」と、私。

納豆が嫌いなことを見抜かれていました。毎日の特訓のおかげで、今は納豆を美味しく食べています。朝寝坊をせず、食べ物の好き嫌いもなくなり、部屋の掃除も、洗濯も自分でできるようになりました。

下宿のおばさんが私を一から鍛え直してくれたのです。下宿のおばさんは第二の母です。

三畳の部屋は狭くて、前に住んでいた人が残っていた机と小さな家具、そこに布団を敷けば、畳の面が見えなくなります。狭いので夏の夜はことに寝苦しく、壁に裸の背中を当てて体を冷やしながらいました。

下宿のおばさんが、「狭いでしょう。でもそこに、大学四年間と就職して七年間、十一年間も住んでいた先輩がいたのよ。大人しくて、休みの日も部屋で過ごしているような子だったわ。右腕に障害があった、夏でも長袖のシャツを着てたわ。

でも、とってもいい子と結婚して、今は青森県に帰って幸せに暮らしているわよ。私が結婚できるようにお手伝いをしてあげたの。」

引つ込み思案な青年にどのような秘策を授けたのか、当時、十代の私にはとても感動的な話でした。次回にそのお話をしたいと思います。

新年にあたり、ご利用者に当法人のサービスを利用してよかったと思っただくため精一杯取り組んでいこうと、職員一同心も新たにしているところです。

今年も、何卒よろしくお願ひします。

企画・発行

さぬき広報委員会

デザイン・印刷
北浜町 藤田印刷(株)

老人ホームさぬき

〒760-0005 高松市宮脇町2丁目37-21 tel:(831)4451

ケアハウスさぬき

〒760-0004 高松市西宝町2丁目844-57 tel:(863)7366

[ホームページ] <http://www.sanuki-sha.or.jp>

さぬき
だより

21
新年号

